

「学力低下」論争から何を学ぶか

—「みのりある教育」に向けて—

報告者 センター教授 市川 伸 一

学力低下論争という話題が盛んに議論されてきていますが、この学力低下論争ということをごどのように捉えるか、そしてそれを踏まえてこれからの教育をごどのように考えていったらよいかということについて述べさせていただきます。加えて、本プロジェクトの中で、私たちが試みてきた実践のごことも紹介したいと思います。

1. 学力低下論争をごどう捉えるか

1999年の春頃から「学力低下論」が登場し、マスコミも巻き込んでかなり大きな論争になってきました。その間、教育行政あるいは社会もいろいろな形で動いてきました。学力低下論争というものを捉える時には、一方に「学力低下論者」、すなわち図1の左下に位置する、「学力が非常に低下しており心配である。それで、教育改革の路線のごようなことをやっているとますます学力が低下してきてしまうのではないか」ということで、教育改革の路線には消極的あるいは反対という人たちが存在します。その一方で、右上に位置するごような方もいます。文部科学省の寺脇研さんなどがよくマスコミなどにも出ていらっしゃいました。「基本的には日本の子どもたちの学力は落ちていない。国際比較の調査を見ても、依然として世界のトップレベルである。しかし、自ら学び自ら考えるというごような点では弱い点もある」ということで、教育改革の路線を推し進めようとするという人たちがい

ます。その方たちを「楽観・改革派」と名づけました。

一般に、学力低下論争と言うと、この2つの論争というふうに使われることが多いのですが、実際には論争の当初から、「学力低下は確かに深刻な問題である。しかし、着目している学力が、いわゆる『学力低下論』の人たちとは少し違う。どうすべきかということについても少し考えが違う」という、左上の「憂慮・改革派」という人たちがいます。そして、私自身もこの立場だと思っています。このように、少なくともこの2次元の中の3つの極で考えていかないと議論が混乱するのではないかと考えています(市川, 2002a)。

それでは、学力をごどう捉えるかということについては、これは何も私のオリジナルということではなくて、昔からよく言われていることなのですが、「学んだ力としての学力」、そして「学ぶ力としての学力」、というものにかけて考えるのがよいと思います。そして、「学んだ力としての学力」の中にも、ペーパーテストで測りやすいような力がありますが、普通よくこれが「低下している」と指摘されるものにあたります。しかし、「測りにくい学力としての学力」、「学ぶ力としての学力」、ごこのような点にも着目していく必要があるのではないのでしょうか。それでは、そういう力は低下していないのかという点が問題になってきます。この点については、私たちは自分たちの立場を「もう一つの学力低下論」と呼んでいます。この立場からは、むしろ、そういう力こそが低下していると思われるごような点がたくさんあります。また、その要因についても、単に学習指導要領がどんどん削減されているからという理由からだけではなく、もっと広い社会構造的な問題があるのではないかと考えています。

図2は、よく引き合いに出される藤沢市の調査ですが、子どもたちの学習意欲というのはこの35年間どんどん落ちています。「もう学校の勉強はたくさんだ」というふうにご子どもたちが思っているごようですし、それに伴って学習時間も減っています。そして、学力も確かに下がっているごように思っています。しかし、より深刻なのは学習の仕方、ごどんなふうにご学習を進めていくかという力が随分低下してしまっているごということなのではないかと思

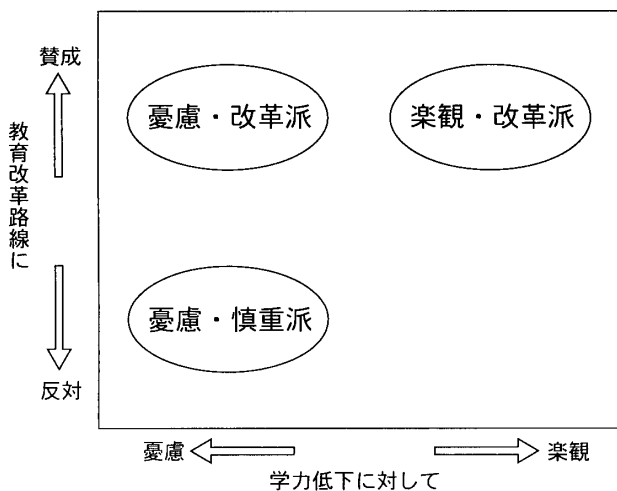


図1 学力低下論争における2次元内の3極構造

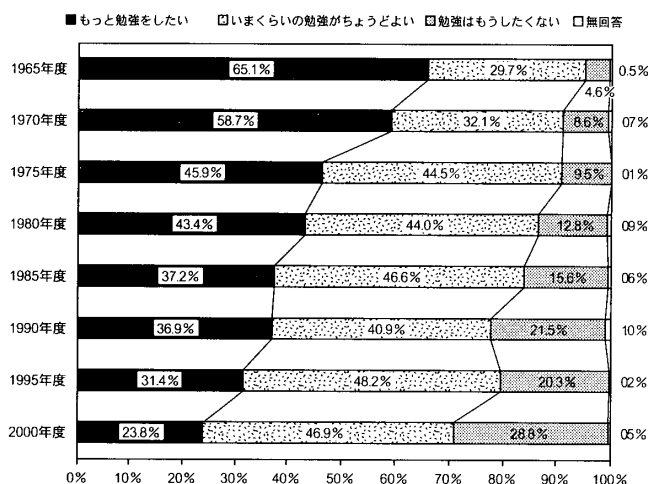


図2 神奈川県藤沢市が中学3年生を対象に行っている調査の結果。「もっと、たくさん勉強したいと思いますか」に対する回答。(「学習意識調査」報告書、藤沢市教育文化センター、2001年3月発行)

私はもともと認知心理学という学問をやってきましたが、認知心理学では、図3のように人間も一種の情報処理をしているシステムだと考えます。しかし、私たちが記憶したり、思考したりする時に、テープレコーダーとかビデオと確実に違うのは、単に情報を丸ごと保存しているわけではなくて、知識を使って理解して取り込むという点です。それから、新しい何か問題解決をする時も、知識を使ってそれを材料として考えるという点も異なります。これがコンピュータともかなり違う人間の独自のやり方です。そのためには、知識ということをや非常に大事にします。

しかし、従来の学校教育に問題がなかったかというのと、ややもすると、知識をどれだけ持っているか、そして定着しているかどうかをテストする、そういうことだけに

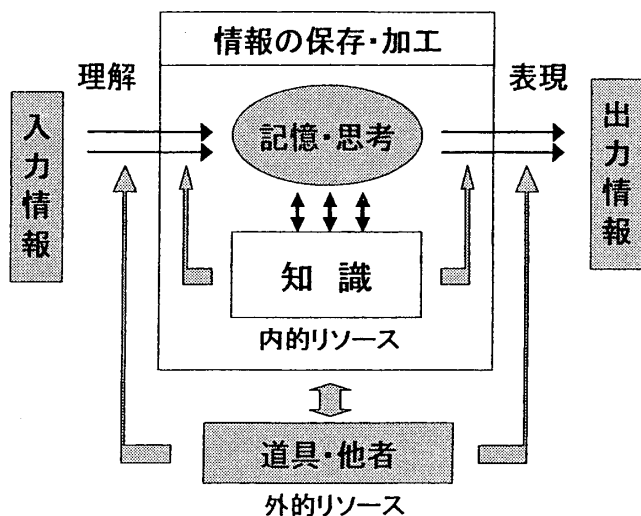


図3 人間の情報処理から見た学力

終始していたきらいはないだろうかと思います。知識は確かに大事なのですが、それを蓄えているだけではダメで、どう生かすかという場がもっと学校にも求められているのではないのでしょうか。実際、「総合的な学習の時間」になりますと、自分の知識を総動員して問題解決をするということが求められます。

さらに、外的なリソースつまり資源として、道具や他者と関わりながら考えるということも人間の特有のやり方です。こういう学習もこれまで学校ではあまり多くなかったのではないかと思います。どちらかという、テスト場面が典型ですが、「道具は使ってはいけない」、「人と相談してはいけない」、「どれだけ知識をもっているかを独力で試される」というふうになりすぎていたのではないかと思います。これも最近の総合的学習などでは随分変わってきていると思います。道具をどれだけ上手く使えるか、しかも他者と相談しながら問題解決をするという学習が増えてきました。

2. 学習の2サイクル理論：習得と探究のバランスとリンク

「学習の2サイクル理論」と私が最近呼んでいるものがあります。理論というが大げさなのですが、実際には当たり前のことを言っています。私たちが学習をする時には、既存の知識や技能を習得するという「習得サイクル型」の学習というのがあります。これは、例えば中学生・高校生ぐらいになりましたら、少しでもいいから予習をして、何がわからないかをはっきりさせて授業に臨む。つまり、疑問をもって授業に臨む。それで、授業の中で先生に教えられてわかるということもあるでしょうし、またそれだけでは定着しない場合には、また復習によって定着を図る。そして、次の予習へとというサイクルの中で学習していくという流れになります。

一方では、授業の中で何か問題を触発されて、自分の興味を持ったテーマを追究するという「探究サイクル型」の学習もあります。そこでは、追究したことはメモやレポートなどによって表現して、それをまた授業で持ち寄って発表したり、先生からアドバイスを受れたり、友達から意見を聞いたりして、また次の追究へと進んでいく。こういう探究サイクル型の学習というのも、特に総合的学習を中心にして増えていくと思います。実際に教育の中でもこういう学習が奨励されるようになってきました。

このモデルで私が大事だと思うのは、一つにはどうやってこの2つの学習のサイクルのバランスを取るかということです。これまでの日本の学校が、習得サイクル

型の学習に随分偏りがちであったということから、探究サイクル型の学習がもっと入ってきてよいのではないかと思います。また、ただバランスを取るというだけではなくて、結びつき、私は「バランスとリンク」というふうに呼んでいます。習得サイクル型の学習でやったことは、探究サイクルの学習の中でも生きてくるという場面設定をする必要があるのではないのでしょうか。単にテストのために学習するのではなくて、それが自分の問題解決に生きてくるというような場面を設けるといようなことです。

これが随分とやりやすい時代になってきたと思います。例えば、英語の学習で積み上げ型に学習してきても、昔でしたらそれを使うのは5年先、10年先、社会に出てからということであったわけですが、今ではインターネットを使えばすぐにでも実際のコミュニケーションが海外の人たちとできる。このような場面が増えてきました。また、地域の人たちと一緒に活動する、地域の人たちの前で発表するという状況設定も非常にしやすくなってきました。あるいは逆に、探究サイクルの学習をしていると、改めて基礎基本の大切さということが実感されて、習得サイクル型の学習に降りてくる、戻ってくるということもあります。このように、「基礎から積み上げる学び」と「基礎に降りていく学び」、この2つのバランスをどうとって、どう結びつけていくかということが非常に大事だと思います。

もう一つ私が言いたいことは、授業の中だけでなかなか学習は完結するものではないということです。もっとも、小学校低学年ですと、まだ自分でどうやって学習するかという自己学習力があまり付いていません。そういう時期にはできるだけ授業の中ですべてを包み込もうとします。いわゆる「導入—展開—まとめ—ドリル」という流れです。そして、ドリルでやり残した分ぐらいは家での学習ということで宿題が出るかもしれません。このように、できるだけ授業の中で包み込んで丁寧な指導をしようと思います。探究サイクル型の学習にしても、追究したり、表現したり、あるいは地域に出て行って体験するとか、そういうことも全部授業時間内にやろうとします。これは無理もないことだと思います。しかし、そういう学習から次第に授業の比率は相対的に減っていかざるを得ません。大学に入れば授業の比率はもっと小さくなります。社会に出れば授業はなくなります。その時に、こういうサイクルを自分で回していけるような力をつける、それがむしろ学校教育の中でも求められることではないかと思います。

3. 授業外の学習支援の重要性

次に、授業外の学習支援の重要性ということについて述べます。先ほど述べましたような学習のサイクルを自分で回していくためには、1つには自己学習力、つまり自分で自主的に学ぶスキルを身につける必要があります。しかし、それははじめから求めるというのは非常に難しい。むしろ授業外にもいろいろな使えるリソースがあるということがこれからは求められると思います。今、実際に教科の学習についても、文化社会的な活動についても、確かにいろいろなものが用意されていますが、それをもっと充実させて子どもたちにどんどん利用しやすくしていくこと、これがおそらくこれから必要になるのではないのでしょうか。とりわけ学校週5日制になって、学校だけではない学びの場というのが求められてきています。それは家庭・地域ということになるでしょうが、そこに民間も加わって、特に自治体には力を入れてほしいと思います。仮に学校という場所を使うにしても、もっと自治体や民間がそこに入ってきて、子どもたちの学習のサポートをすることが必要だと思います。

私たちがやってきた試みについていくつか紹介させていただきます。例えば、「認知カウンセリング」という活動があります。これは端的に言いますと、個別学習の学習相談室です(市川, 1993, 1998)。最初は、1989年に東工大に「夏休み学習相談室」というのを作りました。小・中・高の子どもたちが夏休みを中心にやってきました。その活動の中では、私たち教育心理学者あるいは、私の研究室にいる学生が家庭教師のようなことを行います。しかし、そのケースを持ち寄ってよりよい教え方にするにはどうするかという研究していきます。その後、東京大学にこれを移しまして、今でもその研究会が続いています。将来的には、学校にも保健室の学習版のようなものとして、こういうものができるといいのではないかと考えています。そして、今現在、実際にいくつかの学校、例えばこの附属学校などでも学習相談室というものを開いています。学校によって形態はいろいろですが、学校の先生がローテーションでやってくださるところや、あるいは、保護者のボランティアの方がやってくださるところ、あるいは私の大学院生が行っているところもあります。私自身も週1でこちらの附属にうかがっています。

さらに集団でできるものとして、「学習法講座」とか「学習ゼミナール」ということを行ってきました(市川, 2002b)。学習法講座の方は東大附属で行ったものですが、英単語学習講座ということで、4日間いろいろな英単語の覚え方というのを体験し、自分にあったやり方を探して

いきましょうということを実施しました。また、「遊びと学びセミナー」という中では、「夢の仕事」ということをテーマにして、例えばゲームクリエイターになりたいという子どもたちが実際に取材したり、インターネットを調べたりしながら最後発表するという、仕事と関係づけながらの学びということを実施しました（植木ほか、2002）。あと、今ここの附属でも授業でやっていますが、高校生が自分達でWeb Magazineを作るという現代的なテーマについて調べて取材して、最終的にWebの雑誌として発行していく「NewsWeb Project」を行っています。

4. 学力低下論を越えて

最後に学力低下問題をどう乗り越えるかについてお話ししておきたいと思います。学力低下問題に関しては、今や「学力低下問題の問題」が生じてきています。つまり、学力低下問題が声高に言われることで、公教育への不信がかなり起きてしまっているということです。その結果、公立離れとか塾依存ということも起きてしまいました。

先ほど述べましたように、学力低下問題に取り組んでいくためには、習得と探究のバランスとリンクをどう取っていくかということ、それから生徒・保護者・学校・地域・行政それぞれの役割と責任を自覚することが重要だと考えます。教科時間は確かに減りましたが、それでもやはり、基礎学力を落とさない方法というのはあると思います。それぞれが頑張らないといけないわけですが、まずは、家庭学習の促進が重要だと考えます。これには適度な宿題とか学習スキルの指導を行うということも大事だと思っています。また、授業以外の学習支援サービ

スの充実も必要になってくるのではないのでしょうか。

もう一つ、これは異論もあるかと思いますが、「教えずに考えさせるのがいい授業だ」ということがひとつ言われすぎたのではないかと思います（市川、2001）。与えるべき知識はむしろ先生がわかりやすく丁寧に教えるけれども、それに留まらず、教えて考えさせる授業、つまりその知識をもとにしてその先を考えていく授業というのが、基礎学力も落とさず、発展的な力を伸ばしていくという上で必要な、これからの授業のあり方ではないかと思っています。

<参考文献>

- 市川伸一（編）1993『学習を支える認知カウンセリング』、ブレーン出版
市川伸一（編）1998『認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導』、ブレーン出版
市川伸一 2001 新教育課程における基礎・基本の定着と学力低下問題 『教育展望』9月号
市川伸一 2002a 『学力低下論争』、ちくま新書
市川伸一 2002b 大学で開く中学生向け学習セミナーの試み 『学校臨床総合教育研究センター年報ネットワーク』、No.4, Pp.16-20.
植木理恵・清河幸子・岩男卓実・市川伸一 2002 「テーマ学習における自己制御的活動の支援——地域における実践活動から——」『教育心理学研究』、Vol.50, Pp.92-102.

本論文は、2002年度公開シンポジウム（2002年12月7日）で報告されたものである。